

る。

付録として五十音順の「書名通検」およびウェード式中国音による「書名通検首字検字表」が付されている。私たちにとつて、五十音順の索引は、もつとも便利であるが、外国人には利用できない処から、彼らの使用の便宜をも考へて、中国音首字検字表を付加された、編集者中田氏の行き届いた配慮に敬意を表しておきたい。

さきに、東洋学文献センター連絡協議会編『中国地方誌連合目録』（一九六四年、油印）が刊行されたが、この目録に収められているのは、僅かに東洋文庫・東洋文化研究所・人文科学研究所および内閣文庫の四機関にすぎず、静嘉堂文庫・尊経閣文庫あるいは天理図書館のような多数の地方志を擁する機関が欠けており、地方志のユニオン・カタログとしては、すこぶる不完全なものであつた。今回、わが国内の主要な所蔵機関を網羅した『総合目録』が公刊されるに至つたことは、本当に喜ばしい次第である。本書刊行のために終始かわらぬ努力をつづけられた中田吉信氏に、中国史研究者の一人として深甚な謝意を捧げたい。（昭和四十四年三月、国立国会図書館参考書誌部刊、B五判、三五〇頁）

付言——本書の購入を希望されるむきは、清和堂書店（東京都新宿区信濃町一七、電話三五三—七八三二）で取り扱つ

ているから、国会図書館ではなく、清和堂あてに申しこんでほしいとの由である。

王樹槐 著

咸同雲南回民事變

中田吉信

咸豐四年（一八五四）から同治十二年（一八七三）までの十八年間にわたる雲南回民の事變については、今まで組織だつた研究が発表されていなかった。戦前では、矢野仁一氏の「近代支那史」（弘文堂 昭和十五年刊）の第十八章「雲南回教徒（パンツェー）の乱」が、僅か十四頁ではあるが、信頼できる唯一の梗概であつた。金吉堂氏の「中国回教史研究」（北平成達師範学校 民国二十四年序）、傳統先氏の「中国回教史」（長沙 商務印書館 民国二十九年刊）にも、この事變を取り扱つた一節があるが、どちらも杜撰で、誤りが多く、わが外務省調査部の「回教事情」第一巻第一号に掲載されている「雲南における回教徒」も本格的な研究とは言えない。戦後になつて、中国では、王佩琴氏の「杜文秀革命軍底団結問題」（華北大学歴史系研究室「太平天国革命運動論文集」北京 一九五一年刊、所収）、田汝庚氏の「有關杜文秀對外關係的幾個問題」（歴史研究 一九六三年四期、所収）

が発表され、白寿彝氏の「回回民族底新生」(東方書社一九五一年刊)、林幹氏の「清代回民起義」(新知識出版社一九五七年刊)にもこの事変を取り扱った章があるが、十分とは言えない。王氏の研究は事変の性格を論じたに過ぎず、田氏の研究は杜文秀の大理政権の対外関係の考察にとどまっている。白氏の著作のなかでこの事変に関する章は十一頁、林氏の著作でも十頁足らずである。わが国では、今永清一氏の一連の研究——今永氏が別府大学紀要、史学研究に発表されたものは、そのほとんどが氏の著作「中国回教史序説」(弘文堂 昭和四十年刊)に収められている——、寺広映雄氏の「雲南ムスリム叛乱の性質について」(大阪学芸大学紀要 人文科学五、所収)等が発表されているが、これらも十分とは言えない。今永氏の一連の研究も、あるいは雲南回民社会の構成に重点がおかれ、あるいは清朝の対回民政策、特に道光年間の事変とその対策を論じたものが多く、咸豊・同治年間の事変を中心に記したのは「太平景象象革命の原因に関する一考察」(別府大学紀要第十一集 一九六二年八月、所収)——この論文は「中国回教史序説」に収められていない——だけで、これも事変の原因の考察に終っている。寺広氏の研究は、事変の概要を非常に要領よく把握しているが、十二頁ほどの短いもので、これも本格的の研究とは言えない。本書の著者王樹槐氏がその自序のなかで、ほぼ同じ時期に起った洪

秀全の太平天国と、雲南回民杜文秀の大理政権を比較したのち、太平天国の研究には優れた業績が多いが、雲南の回民事変については、今まで一部も完成した研究が見当たらない、と記しているが、全く同感である。その意味において、四百頁を越す本格的、実証的研究が王氏によつて完成されたことは喜ばしいことである。著者の経歴については知ることを得ないが、「外人与戊戌变法」という著書を、本書と同じ「中央研究院近代史研究所專刊」の十二として、民国五十四年に発表している。恐らく「イスラム」あるいは「イスラム史」の研究家ではなく、「中国近代史」の研究家であろう。以下、本書の内容を簡単に紹介したい。

緒論は「清以前中国回民的發展」で、「回教的伝入与發展」、「回民的地位与角色」、「回民对中華文化的態度」、「元明回民引起的社会問題」の四項に分れ、イスラムの中国伝来から、明代までの中国回民の歴史を略述している。注目すべきは、この緒論に田坂興道氏の「中国に於ける回教の伝来とその弘通」(東洋文庫 昭和三十九年刊)が随処に引用されていることである。従来、中国イスラムの歴史を略述する場合には、ほとんどが前掲の金吉堂氏や傳統先氏の著作、あるいは馬以愚の「中国回教史鑑」(長沙 商務印書館 民国三十一年刊)などが基本資料とされてきたが、田坂氏の貴重な労作が海外

にも紹介され、これが従来の杜撰な研究にとつて代えられたことは喜ばしい。王氏のこの緒論の部分は、田坂氏の研究を基礎にし、これに基づいて記述されたといつても過言ではない。「明実録」を始め、「万曆武功録」「輟耕錄」などの原典から史料を引用した例が散見されるが、これらはすべて田坂氏がその研究の中で引用されたものに限られている。緒論に関する限り、著者が新たに発見した史料は見当らないようである。

第一章は「事變的原因」で、「遠因」「近因」の二節に分たれている。「遠因」の節では、宗教、政治、社会經濟の三項目について考察している。注目すべきは、宗教の項の中で、中国回民の由来を説明し、アラブ、トルコ、ペルシア、中央アジア、近東の多くの異つた種族を包括し、東来後、漢、滿、蒙等の諸族と混合し、長期の薰陶を経過して、同一信仰の中華回族を成立したと記していることである。これは中共側の白壽翁の「回回民族説」と同じ理論で、国民党の多くが主張している回教徒即ち漢民族説——漢人と回民の相異は宗教に限られていて、民族上の差別はないという理論——を採用していない。そして漢回兩族の衝突の原因で宗教教義に涉るものは少く、多くが信仰儀礼の相異——偶像崇拜の問題など——と、生活習慣の相異——飲食特に豚、牛の問題——にあるとしている。政治の項では、清朝の回民に対する政策、

特にその不法に蔽刑を以て臨んだ立法措置を非難している。そして漢回の争いは、多くは漢人が回民を欺凌したのに始まる。回民がこれに復讐を企てると、地方官は漢人に左袒する。そこで回民は官に抗するようになり、抗官は即ち叛逆となつて收拾できない状況に立ち至つた、と説明している。社会經濟の項では、人口増と耕地面積の頭打ち、田賦の増加に伴う人民の抗糧運動、苛刻な塩課、道光年間の銀の騰貴と銅の暴落による雲南の經濟的苦境、更に遊匪、秘密結社の存在、漢回の農地、鋤業権の争奪などを記している。「近因」の節では、咸豐四年の楚雄府石羊銀廠における漢回の争いが導火線となり、同六年四月十六日から十八日にかけて、巡撫舒興阿、按察使清盛が省城内外の多数の回民を惨殺したこと——その数は二、三千人とも、二万人ともいわれる——が事變拡大の決定的な原因となつた、としている。官の公平を期待していた回民は全く裏切られ、各地で一斉に騷起したが、これもこの省城の惨殺の報に接したためという。

第二章は「回民領導人物及其態度」で、事變に際しての回民側の有力な指導者三名、即ち、馬德新、馬如竜(馬先)、杜文秀について、その人物と態度を詳述している。かつてメッカに巡礼し、その学識と人格によつて雲南回民の尊崇を一身に集め、同宗者の保護と和平に奔走し、事變平定後、陰の主謀者として殺された馬德新。武勇に優れ、当初は叛乱に加担

したが、中途で清朝側に帰順し、事変平定に最も功があつた馬如竜。大理を占領して、「總統兵馬大元帥」を名乗り、太平天国の一味であつた沙謙を登庸して、漢回連合政權を樹立、滿清の打倒を呼号して、最後まで清朝に屈しなかつた杜文秀。この三人の人物像が豊富な史料から浮彫りにされて興味深い。特に馬徳新の経歴は雲南回民の悲劇の象徴と言えよう。道光年間にビルマ経由でメッカ巡礼を果たした彼は帰途、コンスタンチノープルで、天文、地理、イスラム經典を学ぶ。シンガポール、広東經由帰国した後、その学識と人格を慕つて教を請う者多く、馬如竜、杜文秀もその弟子であつた。彼の宗教信仰は「以博愛為主」であり、志は儒回兩教の調和にあつた。これも漢回の争いを無くそうとする彼の悲願からである。事変が勃発すると、彼は血気にはやる馬如竜を押しとどめた。しかし省城で多数の回民が惨殺されたという報に接すると、徐元吉、馬如竜とともに蹶起し、推されてその首となり、軍を省城に進める。この時、既に六十二歳。しかし彼は滿清政府の打倒を目指していたのではなく、減回を主張した者の処罰を要求するにとどまつていた。省城を包圍し、總督恒春を自殺に追いこんだ後、咸豐八年正月に新總督吳振械と和解、吳は彼の要求によつて団練の指導者達を処罰し、彼に四品頂戴を賞給する。彼は和平に懸命の努力をし、馬如竜が帰順した後は、大理の杜文秀にも使者を派し和平を

勧告する。同治二年正月、省城に入城した回民馬榮は突如として總督潘鐸を殺し、クーデターを起す。署布政使岑毓英は馬徳新を署總督に推し、馬如竜に請うて馬榮を省城から追い、治安を回復する。しかしこの事件後、馬徳新は新任巡撫賈洪詔や四川總督駱秉章から「狡黠異常、包藏禍心」として疑惑の眼を向けられる。これも彼が同宗者のために弁護したからである。馬如竜は帰順した後は専ら清朝に忠節を尽し、杜文秀の打倒を狙う。杜文秀はあくまでも妥協せず、滿清政府と対決の姿勢をくずさない。この間にあつて馬徳新は苦慮し、ある時は自ら大理に赴いて杜文秀に和平を説き、ある時はフランス人 Garnier の一行を大理に紹介したりして、和平への努力を捨てない。これも同宗者を助けたい一心から出たものであろうが、かえつて清朝側の疑惑を深める。大理が陥落し、事変が解決した後、馬如竜の留守中に、岑毓英の手によつて叛乱の陰の主謀者として殺される。彼については、首鼠両端とか、平南王たらんとした野心家とか、説く者があるが、著者は、和を主張し、同宗者を庇つたために悲劇に陥つた時代の犠牲者とする。

第三章は「官方的因応」で、四節に分れている。第一節は「朝廷的態度」で、これを三期に分けている。第一期は咸豐八年頃までで、剿撫の方針が一定していなかつた時期、第二期は同治元年頃までで、剿撫併用時期、第三期はそれ以降

で、勦を主とした時期とする。ただ責任ある地位に居たものには主撫論者も多く、巡撫徐之銘、總督潘鐸、張亮基、勞崇光等はこれであり、反対に四川總督駱秉章、雲南巡撫賈洪詔、提督福陞は主勦論者であつた。第一節は「疆吏的齟齬与畏蕙」で、總督と巡撫の意見の対立、總督、巡撫に任命されても、病氣や老年にかこつけ、なかなか任地へ赴かなかつた大員、更に總督張亮基と不和で、兵餉問題からその作戦を邪魔立てした四川總督駱秉章の態度などを記している。第三節は「官兵的胡為」で、地方官の無能と不公平、兵練特に団練の無規律、暴行を例示している。第四節は「岑毓英の智略」で、事変の鎮定に活躍した岑毓英の人物、行動、その馬如竜との關係などを考察し、彼の功績を讃えている。

第四章は「変乱的平息」で、三節に分れている。第一節は「一般原因」で、漢回的人数、武器、糧餉の比較、相方の頻繁な投降を、例をあげて、説明している。中国回民の人口については、近年まで定説がなく、まして事変当時の雲南回民の人口は推定が難しい。著者は当時の雲南の総人口を七百五十万、回民は多くてもその約十分の一、七十万を越えることはないだろう、と推計している。第二節は「馬如竜受撫的影響」である。馬如竜が帰順したために、回民側は分裂し、事変の終結が早まつた。彼の帰順によつて滇南地方の局面が安定し、彼が、クーデターを起した馬榮を追つて、これを殺し

たことにより、局面の逆転を防いだ。こういう彼の功は大きい。しかし大理西征に失敗し、杜文秀の反撃にあつて負傷し、そのために大理攻略戦に参加できず、岑毓英に名を成さしめたのであつた。第三節は「杜文秀的措施失当」である。杜文秀は大理に漢回連合政権を作つたが、その志は雲南に限られ、往年の南詔国の規模にとどまつた。省外に兵を出す積極さがなかつた。対外的にも、英・仏の使節の訪問を拒否し、その援助を得ようとしなかつた。最後になつて劉道衡を派遣して英国に援助を求めたが、時既に遅かつた。国内方面でも、太平天国とは地理的に隔絶し、信仰も異り、連絡がつかなかつた。滇匪藍大順、四川の石達開、貴州の苗族とも連絡をとらなかつたようであり、陝西・甘肅の回民とも、相方に自発的な往来は多少あつたにせよ、積極的に使者を派遣した形跡はない。杜文秀自身も次第に奢侈、驕慢に流れ、軍の指揮をその女兒と女婿の蔡廷棟にまかせ、自ら陣頭指揮をとる氣概を欠いていた。これが彼の失敗の原因である、として

いる。

第五章は「変乱的影響」で、三節に分れ、人口の激減、經濟の没落、外患の始まりを説明している。

結論は註を含めて五頁足らず、簡単である。宗教信仰の不同は原因の一であるが、最も主要なものではない。根本原因は政治的、社会的、經濟的のものである。漢回兩族の阻隔が

双方の敵視の原因である。初めは些細なことに端を発し、遂には両族の争いにまでなつてしまつた。官吏の処置も悪く、満漢が結んで一体となつたため、遂には回民は漢人を仇敵視し、官に抗するようになった。杜文秀は漢人と連合して満清政府に反抗することを謀つたが、漢回の仇怨は解消せず、大部分の漢人は杜文秀に応じなかつた。また回民側でも、馬徳新は和平を説き、馬如竜は帰順して清朝につき、杜文秀は孤立無援、亡びざるを得なかつた。事変が十八年の久しきにわたつたのは、杜文秀の勢力が強かつたからではない。太平天国をはじめ中国各地で乱が起り、英仏軍の侵入もあつて、清朝が雲南を顧みる余裕がなかつたからである。事変後、雲南は疲弊したが、一応安定し、疆臣の措置も原則上は公平であつた。しかし実際の措置では回民に不利な場合が多く、回民に対する圧迫は続いた。しかし大事に至らなかつたのは、回漢ともに事変の悲惨さを身を以て体験したからである。著者は以上のように結んでいる。

附録として、雲南省図、雲南省新旧州県名称対照表、統計表、引徵書目、引得が附されている。事変前後の戸口比較表、制兵民兵の陣亡表、田賦の比較表など、統計表にも著者の並並ならぬ苦心がうかがわれ、引徵書目も二十六頁にわたる詳細なものである。

以上紹介したように、本書は咸豊同治年間の雲南の回乱を

各方面から考察した本格的の研究である。引用された史料の数も極めて多く、殊に白寿彝の「回民起義」(上海 神州国光社 一九五三年再版)をはじめ、中共治下の本土で刊行された史料集や研究成果を十分に取り入れている点は注目し値しよう。方略の類をはじめとする官撰の記録、各府州県の方志、鎮定に當つた清朝高官の文集、奏稿の類はもとより、叢書に収められている詩文集、漢文のイスラム教文献に至るまで、実に丹念に引用されている。また、ブルームホール(M. Broohthal)をはじめ、外国人の研究や旅行記の類にもよく眼を通してゐる。しかし瑕瑾なしとはしない。第一に、引徵書目にはその名を掲せているが、エミール ローシエ(E. Rocher)の名著「La province chinoise du Yunnan」(Paris, E. Leroux, 1879-1880, 2v.)が十分に利用されていない。このローシエの著作の下冊には、二九頁から一九二頁まで、百六十余頁にわたつて詳細な記録が記されている。ところが本書では、馬徳新の伝記を記した際に、僅かに参照したにとどまつている。このローシエの著作をもつと活用したならば、事変の経過の考察にも違つた面が出て来たであろうし、著者が高く評価している岑毓英についても別の見方が生じて来よう。また中国イスラム研究の嚆矢ともいえるダブリ・ド・リュエルサン(P. Dabry de Thiersant)の「Le mahoméisme en Chine et dans le Turkestan oriental」(Paris,

E. Leroux, 1878, 2v.) について、僅かに回民の人口の推定の際に(本書二四〇頁)参照しただけで、引徹書目にもその名を掲せていない。メブリ・ド・ティエルサンの著作には、その第一冊の一三頁から一五二頁まで、雲南イスラムの歴史が記され、事変の状況もかなり詳しく記されている。このほか欧文文献で落しているものをあげると、T. L. Butler: The great Mahomedan rebellion in Yunnan. (The China Review vol. XVI. p. 83-95) 又 Carné, Louis de: Voyage en Indo-chine et dans l'empire chinois. (Paris, 1872) の第八章「L'insurrection musulmane en Chine et le royaume de Taii」(p. 415-473) がある。前者はかつて「歴史教学」第二巻第五期(一九五一年十一月一日出版)に「雲南回民起義史料」としてその前半が丁則民によつて華訳されたことがあり——後半については明かにし得ない——、後者は「Travels in Indo-China and the Chinese Empire」(London, 1872) とつう書名で英訳されている。

また既述のごとく、緒論では田坂氏の研究が十分に利用されているが、今永、寺広両氏の研究はもとより、中国イスラムに関する日本の新しい研究成果が全く無視されているのは残念である。

これに対し、中国人の研究成果は活発に利用されている。既述の王佩琴、田汝庚両氏の研究をはじめ、中国本土のもの

も利用されているが、次の二篇が落ちてゐる。

馬汝璣「關於杜文秀評價問題」(民族團結 一九六二年三月 二八一—三三頁)

馬恩惠「杜文秀領導的大理政權」(同右 三四—三六頁)
また「近代史資料」一九五八年三月に次の二つの史料が掲載されていることも見逃している。

杜文秀令

岑毓英復李信古楊懋齋書

「近代史資料」のこの号には保健行の「白旗起義始末」という論文も掲せられている。これは咸豐九年、隣の貴州省の普安庁で起つた回民の事変である。「民族團結」にはまた杜文秀の大理政権と他の諸民族との關係を考察した論文が掲せられているらしいが、現物を確めていないので、ここでは割愛することにした。

中共治下の本土の史料集や論文を大いに利用しているのに、お膝元の台湾で、李守孔氏が次の論文を「大陸雜誌」の第二十巻に掲載しているのを見落しているのは遺憾である。

「馬如龍降清之研究」(第一期 一四—一八頁)

「咸豐六年雲南省城滅回考実」(第六期 一〇—一三頁)
以上のような若干の不備はあるにしても、それは本書の価値を低くするものではない。本書は雲南回民事変に関する始めての本格的研究であり、研究方法も実証的であるし、理論

のみが先行している浅薄な研究とは軌を異にしている。本書によつて始めて事變の全貌が明かにされたといつても過言ではあるまい。しかしまだ、次のような問題が残されているのではあるまいか。

第一は、田汝庚氏もかつて取り上げた問題であるが、杜文秀の大理政権の性格である。本書も、田汝庚氏と同じく、大理政権を滿清政府の打倒を目指した漢回連合政権と見ている。しかし、当時の西歐人の眼には、回教徒の手に成る「回教政権」と映じていたようである。ブルームホルの "Islam in China" の一三二頁によると、杜文秀はスルタン・スレイマンと号し、「チベットからイスラム教徒の援兵を獲得しようとして、ラサで声明文を發行した。この声明文はコーランからの引用で始められ、多神教の漢人の打倒と、アブーバクルのように純一で、アリーのようにならざる、真の信仰者の王国の設立を表明していた。文書は立派なアラビア語であつたといわれる」という。ほぼ時期を同じくして新疆を占領したヤクープ・ベクのカシユガル汗国は回教政権の色彩が強かつた。漢人が多く、回民が少い雲南において、ヤクープと同じことを求めるのは無理であろう。しかしムスリムである杜文秀はイスラムを國家の組織の中でどう位置づけようとしていたのだろうか。イスラム法シャリーアを國政の中でどう取り扱おうとしたのであろうか。こういつた点をもつと掘り下げる

必要があろう。

第二は大理政権の對外關係である。杜文秀は末期になつて外國の援助の必要を痛感し、劉道衡をプリンス・ハサンの名でビルマ經由で英國に遣した。清朝はトーマス・ウェードを通じてこれに抗議し、英國はこのため大理への援助を拒絶した。劉は帰途コンスタンチノーブルに寄り、トルコ政府に働きかけたが、間もなく大理が陥落し、これも失敗に終つた。恐らくこの劉の援助要請に関する文書類が、英國、インド、ビルマ、トルコの諸國に相当数残されているに違いない。こゝういつた文書類を調査することによつて、大理政権の對外關係はもとより、その性格、組織、政策などの面でも明らに出されるものが少くないのではあるまいか。今後こゝういつた面からのアプローチが必要であらう。

(台北 中央研究院近代史研究所 民國五十七年 四〇七頁
中央研究院近代史研究所專刊二二)